

<特集随想>法政大学と故西尾実先生の思い出

著者	水野 弥穂子
雑誌名	日本文学誌要
巻	50
ページ	10-11
発行年	1994-07-09
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019756

からの恋人として皆が知っていたUさんと、卒業式の日の午後、クラスメートがお膳建てをした結婚式をひらいた。私の夫妻が即席の仲人ということになった。I君は、朝日新聞の九州支社にずっと勤めている。F・I君とH子さんは同級生で、この二人も卒業後間もなく結婚して娘さんが産れた時、私は名付親になった。たぶん男児だろうというので、法政大学のある富士見町にちなんで、高根という名をえらんでおいた。ところが産れてみたら女児であった。母親のH子さんから電話があつて、女の児でも高根ではどうかと言うので、両

親が賛成なら勿論異議なしだと返事をしておいた。高根さんは、もうとくに大学を卒業しているはずである。六三年クラスは、四年めごとに集るという約束がきている。四年めというのは、国際オリンピックの開かれる年ということで、その度に私を呼んでくれる。いつも十人前後の集まりで、これまで奈良、広島、天草、糸魚川などへ行つた。それぞれの地に六三年組がいる。三十余年にわたる交友である。(94・4・30)

(くぼた まさふみ・元大正大学教授)

法政大学と故西尾実先生の思い出

水野 弥穂子

私の法政大学の思い出は、昭和三十年ごろから通信教育の指導教員をさせていただいたことから始まります。はじめて指導教員控室という所へ行つて見て、その広いこと、多くの立派な先生方が詰めかけていらっしゃるのに驚いたことを覚えております。この指導教員のお仕事も、西尾実先生のお世

話によるものでしたが、ちょうどそのころ、西尾先生は大学院で、世阿弥と同時に『正法眼蔵』の講座を持っておいでになりました。それである時、「ことしは『正法眼蔵随聞記』を扱うから参加してみないか」というお話がありました。もしかしたら、私の方から「ぜひお願いします」と申し上げた

のだったか、今ははっきりしなくなっています。久しぶりの大学の雰囲気になくわくしながら、そのゼミに出席させていただくこととなり、長円寺本の写真撮影の許可を求めて愛知県西尾市の長円寺まで、当時院生だった池辺実氏と一緒に長円寺を訪れたこともありました。東京オリンピックのずっと前のことです。私は勿論院生でもなく、何かのお手伝いができればというぐらいの気持ちで参加させていただいたのですが、そのころは長円寺本『随聞記』の価値はほとんど知られて居らず、結局、写真版から本文を新しく作る作業が私のところに回ってきたのでした。一年間の演習の結果をまとめたものが筑摩書房の日本古典文学全集にも入り、岩波の古典大系にも入ることになったので、私の『随聞記』研究の出発点となった法政大学の大学院の授業からは忘れることのできない御恩を蒙っているわけです。

『随聞記』のあとも、西尾先生の『正法眼蔵』の授業に出していただき「仏性」や「山水経」を読む機会を与えられました。例によって私は正式のメンバーではないので、皆さんの発表をひたすら聞いているつもりでおりましたが、時々「水野さん、ここはどう思いますか」と、先生から名ざしの御質問を受けるので、必死になって答えなければなりませんでした。続いて世阿弥の演習にも出させていただき、西尾先生の学風をまのあたり学ばせていただいたことは一生のしあわせでした。

ところで、御存じの方も多いと存じますが今「下伊那教育」という雑誌に「西尾実の生涯とその学問」という題で、安良岡先生が西尾先生の御一代記を連載しておいでになります。現在、七回目ですが、まだ大正十三年、先生が三十六歳の時のことが語られています。そのころ、長野市南県町に住んでおいでになったお家の見取り図などもあり、文献のほかに、親しい方々からの聞き書きを含めた行き届いた御一代記です。東京で御活躍になる以前の先生が、信濃教育のためにどんなに尽されたか、又そのころから、先生を慕って集まってくる御弟子たちには、束脩も謝礼もなく、古典の読み方を教えていらっしやったことなどが書かれています。そのころから、常に音読を重視され、又、教育者として古典を読むという態度を明確にしておいでになるのを拝見しますと、何十年か後の法政大学での大学院の御授業の層の厚さ、底の深さが、改めて思い知らされます。

(みずの やほこ・元東京女子大学教授)